『スーダン遺跡紹介』 第 1 回

メロエ北墓地（Meroe North Cemetery）

坂本麻紀（アラブ調査室研究員）

はじめに

日本でも古代エジプトに対する関心は高く、エジプト関連の展覧会はいつも大勢の来場者でにぎわっている。古代文明にそれほど関心がない人でも「エジプトの3大ピラミッドは知っている」という人は多いのではないだろうか。しかし、ピラミッドの数だけでいえば、エジプトよりスーダンのほうが多いということをご存じだろうか。エジプトと同じようにナイル川が流れるスーダンでは古くから文明が栄え、ナイル川流域を中心に多くの遺跡が点在する。筆者は紀元前 1 千年紀前半のスーダンの葬制を研究テーマとしており、2007 年にスーダンの遺跡を訪れる機会を得た。不定期にはなるが、これから数回にわたって、日本ではあまり馴染みのないスーダンの遺跡を紹介しようと思う。1回目は 2011 年にユネスコ世界遺産に登録された「Archaeological Sites of the Island of Meroe」の中から、砂漠の丘陵に並ぶピラミッド群が美しいメロエの北墓地（North Cemetery）を紹介する。

尚、写真は全て筆者が撮影した。

Meroe North Cemetery （南西より遺跡を臨む）

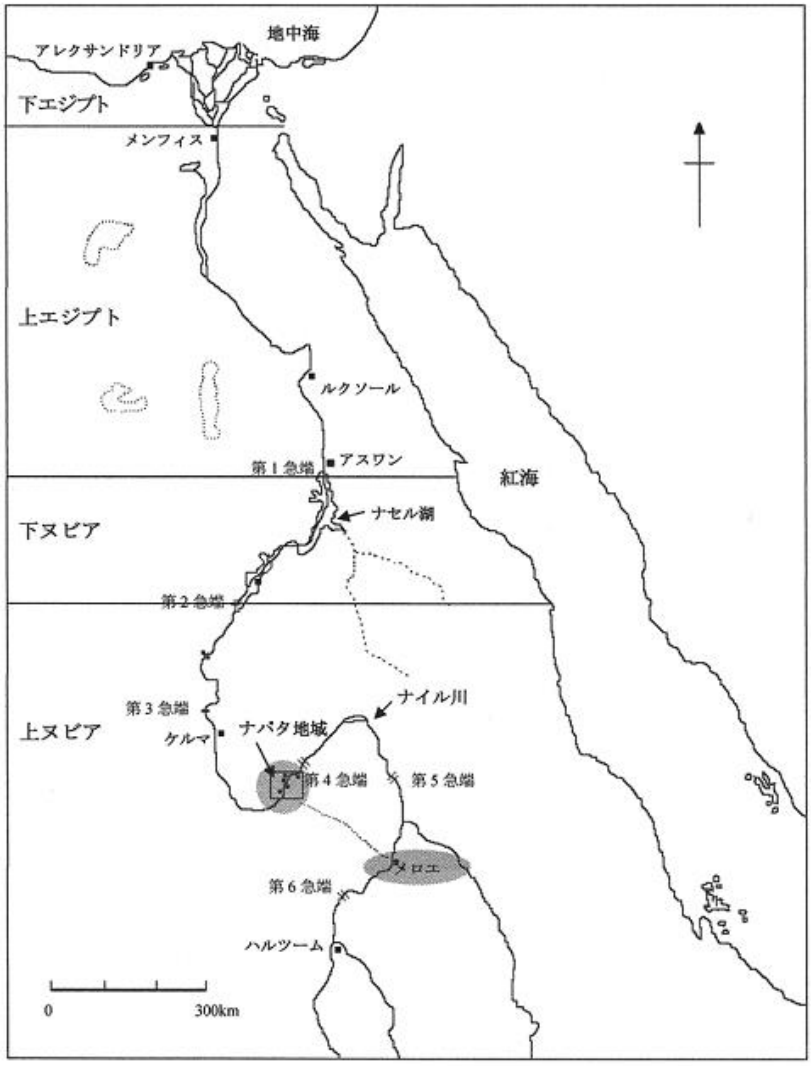
1. 古代スーダン（Ancient Sudan / Ancient Nubia）とは

スーダンの遺跡を紹介する前に、古代におけるスーダンの地理的な範囲や年代、隣国エジプトとの関係などを整理し、遺跡の持つ歴史的な背景を理解するための一助としたい。

①ヌビアの地理的な範囲

まず古代スーダンの地域を指す名称として、研究者は「ヌビア（Nubia）」という用語を使っている。このように説明すると「古代スーダンはヌビアという国だったということか？」と聞かれることがあるが、ヌビアは国の名前ではなく、地理的な領域を示す用語と考えていただければと思う[1]。ヌビアでは時期によって、大規模な墓域を形成する集団や、首長制社会、国と呼べるような社会が出現するが、それらは発掘者がつけた名称に加え、古代エジプト側の文字資料を基につけられた名称や、活動の中心となった地域の名称等で呼ばれる。

通常、ヌビアは下ヌビアと上ヌビアの2つの地域に分けられ、下ヌビアは現在のエジプトのアスワンの南からナイル川第2急湍（カタラクト）までの範囲を指し、上ヌビアはナイル川第2急湍から第6急湍辺りまでの範囲を指す。しかし、20 世紀初頭に建造されたアスワンダムと 1970 年に建造されたアスワン・ハイダムにより、下ヌビアの地は巨大なナセル湖の下に水没し、この一帯の遺跡も現在は確認することができない状況である。



ヌビア・エジプト全図

②ヌビアの年代とエジプトの関係（紀元前 4000 年頃～1070 年頃）

少なくとも 30 万年前にはスーダンに人が住み着いたと考えられている。ヌビアとエジプトは非常に密接な関係にあり、紀元前 4000 年頃にエジプト南部で発祥したナカダ（Naqada）文化と、紀元前 3800 年頃に下ヌビアの北側で発祥した A グループ文化（A-group, 3800-2900 BCE）は、初期の頃から交流を持ち、紀元前 3450 年頃には交易を行っていたと考えられる[2]。下ヌビアではこの後、しばらく活動が分からない空白期間があり、C グループ文化（C-group, 2500-1500 BCE）へと変わる。

上ヌビアではナイル川第３急湍のケルマ地域を中心に、先ケルマ期（Pre-Kerma, 4000-2600 BCE）、100 年ほどの空白期間の後、ケルマ期（Kerma, 2500-1500 BCE）へと続く。このケルマ期はクシュ王国（Kush）の時代といわれ、古典期ケルマ（Classic Kerma, 1750-1500 BCE）の時期には、王と考えられる人物の巨大な墳丘墓が築かれ[3]、その支配領域はナイル川第1急湍から第4急湍の先まで広がっていたと考えられる。また王墓では構造や副葬品等にエジプトの影響が見られるが、A グループ文化からヌビアで見られるベッド埋葬なども引き続き見られる。このケルマのクシュ王国は、たびたびエジプトを脅かす存在であったことがエジプト側の記録から分かっている。

ヌビアは金や銅などの天然資源を産出するだけでなく、アフリカの南の地とエジプトとをつなぐ交易の中継地点であったことから、紀元前 3100 年頃にエジプトが国家として成立してから、ヌビアはたびたびエジプトに支配される。エジプトの中王国時代（Middle Kingdom, 2040-1780 BCE）には、下ヌビアから上ヌビアの北にあたるナイル川第1～第3急湍の間に 17 の要塞が造られ、またエジプトの新王国時代[4]（New Kingdom, 1550-1077BCE）には、ヌビアの地に多くの神殿が造られるなど、ヌビアはエジプトの属国となった。

③ヌビアの年代とエジプトの関係（紀元前 1070 年頃～300 年頃）

エジプトの中央集権制が崩壊し、エジプト国内が第3中間期（Third Intermediate Period, 1076-723 BCE）に入った頃から、ヌビアではナイル川第4急湍のナパタ地域を活動拠点としたクシュ王国が勢力を伸ばす。この時期をナパタ期（Napatan Period, 1000-300BCE）と呼ぶ。クシュ王たちは混乱していたエジプトを統一し、エジプトのファラオ（王）として、エジプト末期王朝時代[5]（Late Period, 722-332BCE）第 25 王朝（クシュ朝, 722-655 BCE）を樹立する。

クシュ王たちによるエジプト支配はわずか 70 年ほどであるが、この間、彼らは歴代のエジプト人ファラオと同じように、上下エジプト王の名前（称号）を持ち、エジプトのシステムに基づいて統治を行い、エジプト国内だけでなくヌビアの地にもエジプトの神々の神殿を建設した。また自らの墓の上部構造にピラミッド[6]を造り、エジプトの棺とヌビアの伝統的なベッド埋葬を組み合わせるなど、エジプトとヌビアの要素を結合させた新しい埋葬様式を生み出した。

ヌビアでは文字を持っていなかったため、この時期から碑文や墓の壁画など限定的ではあるがエジプト語（ヒエログリフ）がヌビアで使われるようになった。ヌビアに取り入れられたエジプト文化は、クシュ王たちのエジプト支配が終わり、エジプトと直接的なつながりが無くなった後も、様々なかたちでヌビアに残っていくこととなる。なかでも王墓地でのピラミッド建造と、エジプト様式の神殿の建設はメロエ期末まで続く。

④メロエ期（紀元前 300 年頃～紀元後 350 年頃） ※今回紹介する遺跡の年代です

ナパタ地域を中心としたクシュ王国は、紀元前 300 年頃にナイル川第5急湍と第6急湍の間に位置するメロエに王都（Royal City）を移す。メロエに活動の中心が移ったことで、この時期をメロエ期（Meroitic period, BCE300-350CE）またはメロエ王国と呼んでいる。

第 25 王朝の時期にエジプトから入ってきたエジプト語は、このメロエ期にヌビア独自のメロエ文字（Meroitic inscriptions）に代わり、墓の碑文や供物台、ステラなど様々なところでメロエ文字が用いられるようになる。

メロエにはすでに第 25 王朝の王たちと関連した人々が眠る南墓地（South Cemetery）と西墓地（West Cemetery）があった。西墓地はメロエ期の終わりまでエリートたちの墓として使われ続けたが、南墓地はエリートや王族たちの墓としてメロエ期の初期まで使われる。その後、南墓地に代わる新たな墓地、北墓地（Nouth Cemetery）が南墓地の向かい側の丘陵に造られ、メロエ期末まで王と王妃のピラミッド墓が造られた。

墓地群から西へ4km ほどの距離に位置する王都は、ナイル川右岸にある。敷地内の王宮址 M294 の基礎部分の年代測定では紀元前 10 世紀～8世紀の数値が示されたという。また他の遺物からも古い年代が測定されていることから、メロエのこの地域はかなり早い段階（紀元前 10 世紀～9世紀頃）から利用されていたのではないか、との推測がなされている[7]。

第 25 王朝の時期に導入されたエジプト王の称号（Horus name, Son of Re, Lord of the Two Lands など）は、ヌビアの王たちに使用され続けていたが、ナパタ期末やメロエ期には、男性形の称号を持つ王妃が現れるようになる。このことから、単独もしくは夫である王とともに共同統治を行っていたと考えられている。また、ヌビア独特の称号も出現し、メロエ文字で王妃を意味する「kn-ti-ky/ktke」（カンダケ）という王妃に与えられる称号や、メロエ語で王を意味する「qore」（ゴア）という称号などが重要なものとして挙げられる[8]。

2. メロエ北墓地の基本情報

ナイル川から東に5km ほど入った砂漠地帯の丘陵上に位置する遺跡である。ここには 33 人の王と 8 人の統治者である王妃、そして 3 人の王位を有する王子に関連する 41 基のピラミッドがある。メロエ期の初期の王と王妃（2 世代まで）は、この遺跡の向かい側に位置するメロエ南墓地のピラミッドに埋葬されている。この北墓地には王位に就いた者だけが埋葬されており、王位を有さない王妃や王子などは、エリートたちの埋葬地である西墓地に墓が造られた。これはナパタ時代と大きく違っている点である。

初期のピラミッドは外側を化粧石で覆い、その中を小石で満たしていたが、時間が経つにつれて経費や労力の削減が行われ、石の代わりにレンガが使われ、ピラミッドのサイズも小さくなっていった。もっとも大きなピラミッドは、紀元前 150 年頃の統治者であった王妃の墓（Beg,N11）であり、その高さは 26m で、大きさは 19.3 ㎡である。また、ピラミッドに付属する神殿型の建造物（Offering Chapel）も他の墓に比べてより複雑な構造になっている。この神殿型の建造物の内側にはレリーフが施されており、それらのレリーフからピラミッドの年代や宗教儀礼など様々な情報を得ることができる。神殿型の建造物によって、内側の壁にエジプト語で書かれている場合と、メロエ文字で書かれている場合があり、築造年代によって違いがある[9]。

Meroë North Cemetery : Pyramids（大きさ）

Meroë North Cemetery : Pyramids（表面の形状）

・ピラミッドの角（端）が装飾のように削りだされているのが特徴。
・ジェバル・バルカル横にあるメロエ時代建造と考えられている
ピラミッドも同じような特徴を持っている。

Meroë North Cemetery : Pyramids（表面の形状）

階段状とも表現されることがあるが、エジプトのサッカラの階段ピラミッドとは違う。どちらかといえば、傾斜角度、大きさ、頂上の形状などは異なるが、このピラミッドの表面は化粧石がなくなったエジプトのギザのピラミッドのようである。

Meroë North Cemetery : Pyramids（表面の形状）

ピラミッドの角（端）が装飾のように削りだされるタイプではなく、表面が階段状のタイプより滑らかなピラミッドである。

Meroë North Cemetery : Pyramids

これらのピラミッドは見ただけでは分からないが
表面は砂岩でできていても中はスラブと呼ばれる
小石が詰められており、頂上の石が何らかの要因で
取り除かれ、そこに雨などが入ると、この写真のように
中の小石が外にあふれ、ピラミッドが崩壊する。

Meroë North Cemetery : Pyramids

このピラミッドは多重構造になっている。このような例は珍しいが、
タハルカ王のピラミッドも多重構造であることが確認されている。

Meroë North Cemetery : Chapels

Meroë North Cemetery : Chapels

参考文献

Dunham, D.

1957　*Royal Tombs at Meroë and Barkal*, The Royal Cemeteries of Kush Vol.4, Boston.

Edwards, D. N.

2004　*The Nubian Past: An Archaeology of the Sudan*, London and New York.

Emberling, G. & B. B. Williams (eds.)

2020　*The Oxford Handbook of Ancient Nubia*, Oxford University Press, New York.

Fisher, M. M. (ed.)

2012　*Ancient Nubia: African Kingdom of the Nile*, The American University Press, Cairo.

Gatto, M. C.

2020　"Chapter 7: The A-Group and 4th Millennium BCE Nubia", in Emberling & Williams (eds.) 2020 : pp.125-142.

Grzymski, K.

2020　"Chapter 28: The City of Meroe", in Emberling & Williams (eds.) 2020 : pp.545-561.

Lacovara, P.

2012　"The Land of Nubia", in Fisher (ed.) 2012 : pp.5-9.

Phillips, J.

2016　"20. Women in Ancient Nubia", in S. L. Budin & J. M. Turfa (eds.) , *Women in Antiquity: Real Women across the Ancient World*, Routledge, London / New York : pp.280-298.

Yellin, J. W.

2020　"Chapter 29: The Royal and Elite Cemeteries at Meroe", in Emberling & Williams (eds.) 2020 : pp.563-588.

高宮いづみ

2006『古代エジプト文明社会の形成』諸文明の起源 2、学術選書 12、京都大学学術出版会

2008「第 7 章:ナイル河流域における交易システムの発展と初期国家の形成:下ヌビアにおけるナカダ文化と A グループ文化の交易システム」『現代の考古学 7　国家形成の考古学』、朝倉書店

---

[1] 「ヌビア」という用語の由来についてははっきりしない。古代世界ではスーダンは金の産出地として知られていたことから、古代エジプト語で「金」を意味する「*nub*」という語から来ているのではないかと考える研究者もいる（Fisher 2012, p.6）。

[2] ヌビアの A グループ文化の年代に関しては、A グループ文化の研究者として有名な Gatto の年代を採用した（Gatto 2020, p.139）。また、エジプトのナカダ文化とヌビアの A グループ文化の交易システムについては、高宮いづみ氏の書籍を参照した（高宮　2006, 2008）。

[3] 直径 80～90m、高さ 3～4m の巨大な墳丘墓が築かれ、殉葬も行われていた。KX という王墓では被葬者のほか、子どもを含む王の家族や剣を持った家臣など 322 体の殉葬が見られた。

[4] 第 25 王朝の年代については、クシュ王の誰を最初とするかで年代が変わり研究者間で相違がある。

[5] 末期王朝時代の開始時期を第 25 王朝からとするか、第 26 王朝（サイス朝, 664-525 BCE）からとするかは研究者によって異なる。しかし第 25 王朝は混乱していたエジプトを統一していることから、筆者は第3中間期ではなく、末期王朝時代に含めるべきと考える。

[6] ヌビアのピラミッドはエジプトの真正ピラミッドと違い、どれも角度が急傾斜であるのが特徴である。

[7] Grzymski 2020, pp.551-552.

[8] Phillips 2016, pp.288-292.

[9] Yellin 2020, pp.579-585.